

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】 三木健裕

【所属】 (助成決定時)

東京大学総合研究博物館

【研究題目】

都市形成前夜西アジアにおける広域化と階層化: イラン南部ブーシェフル州での発掘調査

【研究の目的】

西アジアは人類史上、都市化へ向かう社会変化がもっとも早い段階から始まった地域として知られ、この長期的なプロセスを探る上で最適なフィールドである。この都市化に関するプロセスはこれまで、南メソポタミア低地を中心に論じられてきた。しかし近年、西アジア各地で多様な都市化プロセスが存在したことが徐々にわかってきた。さらに紀元前 5000~4000 年、都市成立前夜の西アジアでは、窯焼成の彩文土器を代表する物質文化が広域で共有されたのち、地域性が強まるとともに、都市への集住、社会の階層化が進むことがわかっている。本研究の目的は助成決定時、イラン南部ブーシェフル州トレ・スゾ遺跡を対象遺跡として、この地域における都市化プロセスを解明することであったが、政情不安等のため、イラク・クルディスタン自治区、シャフリゾール平原へ対象地域を変更した。

【研究の内容・方法】

助成者は 2022 年以來、ザグロス山麓先史考古学プロジェクト (代表: 金沢大学 小高敬寛准教授) に参加しており、2023 年 9 月にイラク・クルディスタン自治区シャフリゾール平原に所在するシャカル・テペ遺跡で発掘調査を実施した。調査地点である C 区 (面積 3m 四方) の発掘調査では、約 5m、全部で 7 層に及ぶ堆積状況を明らかにすることができた。また発掘の結果、当初発掘を予定していたトレ・スゾ遺跡 (イラン) と同時期にあたる、紀元前 4 千年紀前半の土器資料を大量に入手した。得られた土器片資料の総計は 6044 点、101.3 kg に及ぶ。15 点の放射性炭素年代測定を実施した結果、紀元前 7 千年紀末 (7~6 層)、及び紀元前 3800 年から 3600 年 (5~1 層) にかけての堆積が存在することがわかった。そこでイランでの発掘調査、資料調査に代わり、2024 年 2 月 18 日から 2024 年 2 月 27 日の期間、イラク・クルディスタン自治区スレイマニヤ文化財局に滞在し、シャカル・テペ遺跡 C 区出土土器資料の調査を行うこととした。

土器資料の調査に際しては、土器片を部位ごと (口縁部、胴部、底部、その他)、また土器を胎土や器面調整を基準に 11 種類にわけて計数し、紀元前 4 千年紀前半における変化を探った。また下釜和也氏 (千葉工業大学) と協働し、全部で 378 点の顕著な特徴を有する土器片 (主として口縁部) の実測図を作成した。これにより、土器の器形がどのように変遷を辿るのかを調べた。そのほか C 区の 2 層からは、口径約 26cm の、その内部に幼児を埋葬した完形の土器棺墓が見つかった。都市化が進展するこの時期に土器棺への幼児埋葬例が増加することが先行研究で指摘されており、この時期の社会変化を探る上で重要な考古学的証拠を得ることができた。資料調査期間中、多数のパーツに分かれていたこの完形土器を接合し、石膏を入れて復元した。その上でこの土器の 3D モデルを作成した結果、この土器の元の高さは 48 cm であることがわかった。

【結論・考察】

紀元前 3800 年から 3600 年の期間において、土器の種類としては無文の土器、特に切り藁と石灰岩粒を大量に混和した型成形の外縁口縁鉢が非常に多くを占め、それが時間とともに減少していく傾向、代わって切り藁を混和した精製の土器が増加していく傾向が明らかとなった。土器の器形においても、壺形土器、鉢形土器い

ずれにも微細な形状の変化がみとめられた。こうした成果は、この地域の編年体系を確立する上で非常に重要である。そのほかにも、先に挙げた土器棺への幼児埋葬例の発見や、土器生産を専業とする工人が土器整形時に使用したと考えられる製陶具の一部が発見されており、都市化進展期における埋葬習慣や工芸品製作の手がかりが得られた。物質文化が広域共有された紀元前5千年紀の土器がシャカル・テベ遺跡の別の発掘区が出ており、今回の成果と合わせることで、この地域において広域化から地域性が発現し、階層化へ進む過程をさらに詳細に探ることができるといえる。